

2)熊野古道に見る歴史的風致

熊野古道と湯浅の関わり

湯浅は、急峻な山地が連なる紀伊半島の沿岸に位置しており、山と山の間には僅かな平地が海に面した地形をしている。地理的条件から陸上交通における休息地であり、海上交通における発着地として適した場所であった。飛鳥・奈良時代の天皇の行幸では、紀伊国牟婁の湯（現在の白浜温泉）へ向かう一行が陸路を辿って山を越え、栖原の海岸に降り、そこから海路を進んでいる。また、延長5年（927）にまとめられた『延喜式』に「湯笠駅馬八疋」と記されており、湯笠とは湯浅の古名であるとされることから、少なくとも一時期において、南海道の宿駅となり、陸上と海上の交通の結節点として機能していたことがわかる。

紀伊半島における人の往来は、熊野参詣の隆盛により一層活発になる。古来より、修験道の行場とされた熊野は、阿弥陀信仰が広まり浄土教が盛んになるとともに、本地垂迹説によって熊野三神がそれぞれ阿弥陀・薬師・千手観音と結びついたことから、上皇・法皇をはじめ貴族を中心に熊野詣が頻繁に行われるようになった。



熊野三山（左から、熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社）

熊野への道として利用されたものを総称して熊野参詣道と言う。熊野参詣道は、京から紀伊半島の西岸を進み田辺へ至る紀伊路（紀路）、田辺から東へ折れて山中を進む中辺路、田辺からさらに海沿いを進む大辺路、東からは紀伊半島の東岸を海沿いに進む伊勢路、霊場高野山から紀伊半島の中央部を進む小辺路といったルートがある。

この熊野参詣道紀伊路が通る湯浅は、熊野参詣の際に宿泊地として利用されていた。その様子は、藤原定家が建仁元年（1201）に後鳥羽上皇の熊野参詣に随行した際に記された『熊野御幸記』にも書かれている。

湯浅を通るルートは、定家らが通ったと推測される道を熊野道（熊野御幸街道）、近世に整備された街道を熊野街道と称することがあるが、湯浅ではそれらを総称して熊野古道と呼んでいる。したがって、これらの道について本計画では、熊野古道という呼称を用いることとする。



熊野三山と熊野参詣道 位置図

熊野参詣を支えた湯浅氏

貴族らの熊野参詣が盛んになってきた頃、豪族の湯浅氏が勃興してくる。湯浅氏は、藤原氏の出自であるとされ、湯浅宗重（1118～1195）の時には、有力な地方豪族として力を誇っていた。平治元年（1159）、平清盛が熊野詣で留守中の京都で、源義朝と藤原信頼が挙兵した平治の乱の際には、

京に戻る清盛を、湯浅宗重が兵 30 余騎を出して護衛したことが知られている。源平合戦で平氏が敗れた後、屋島から落ち延びてきた平重盛の子、忠房^{しげもり}を擁して防戦するも、文覚上人^{もんがく}（京都・高尾の神護寺^{じんごじ}の僧）の仲介の元に争いの鋒をおさめ、以後は鎌倉幕府の有力御家人として、京の警備を任されるなど、一目置かれる存在であった。あわせて文覚上人の神護寺に、宗重の四男上覚^{じょうかく}や、孫の明恵^{みょうえ}を送り込むなど、京都の寺院とも関係を深め、政治、経済、文化など多方面で京都との繋がりを持った。



湯浅城跡

宗重は、熊野古道が通る方津戸^{ほうづと}峠に程近い広保山に広保山城を、その東方の青木に本城の湯浅城を築いた。また、湯浅氏は、周辺に顯國神社や若宮神社を勧請し、平野には観音堂を建立している。源氏が何度攻めても落とせなかった要害の城は、平安時代の末期から、文安 4 年（1447）に落城するまでの約 280 年間、湯浅氏の本拠として存在した。

この湯浅城は、戦いのための砦としての要素を持った山城であり、湯浅本家（総領家）は岩崎に住すと言われることから、現在の小字岩崎に館があったと考えられている。熊野古道に近接し、この付近一帯が湯浅氏や家臣の屋敷地であったと同時に、町場として発展し、宿泊施設等もあって賑わっていたと推定される。また、さらに南に行くと、御茶殿^{おちやと}と呼ばれる場所があるが、そこは南西に広がっていた入江を見ながら上皇などが休息した行在所に使われたところだと言われている。前述の『熊野御幸記』には、熊野詣の帰路に湯浅宿所に泊まって、湯浅氏より接待を受けたことが記されている。

このように、湯浅近辺を強力に支配していた湯浅氏の存在は、中世の熊野参詣において、安全な往來を確保し、京との繋がりによる文化的な発展は、貴族らの接待に大いに寄与したといえる。

熊野古道の変遷と旧跡

『熊野御幸記』の頃の熊野古道は、今よりも東を通っていたようである。熊野参詣が盛んになっていった平安時代末期に創建されたとされる別所の勝楽寺^{しょうらくじ}は、往時はその境内もしくはすぐ横を熊野古道が通っていたとされる。時代を経て、湯浅の町場が西へと発展していく中で、熊野古道も西側にルートを変えた。

藤代^{ふじしろ}（藤白）峠、蕪坂^{かぶらざか}を越えて有田に入ると、宮原で有田川を渡って糸我峠^{いとが}にさしかかる。糸我峠を登り詰めると、湯浅に入る。逆川王子^{さかがわ}を経て、方津戸峠を越えると道町^{どうまち}を通って広川を渡って広川左岸を南進し、鹿ヶ瀬峠^{ししがせ}に至る、というのが、有田地方における熊野古道のルートである。古くは、方津戸峠を越えたあと、現在の飛越橋の付近で山田川を越え、そのまま南に下がって勝楽寺を通過し、広川右岸を南下したようである。

糸我峠から広川を越えるまでの湯浅町内の熊野古道沿いには、様々な旧跡が点在し、今も信仰の対象となっているところもある。



熊野古道と湯浅氏関連文化財の位置図

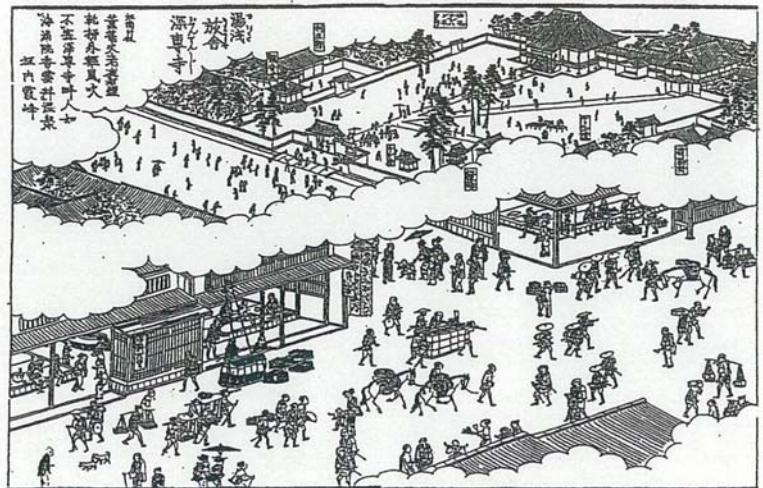
糸我峠を下りきったところにある逆川王子は、熊野九十九王子の一つである。熊野九十九王子は、京から熊野三山に至る紀伊路、中辺路沿いにあり、熊野参詣の途中で儀礼を行う場所である。天保10年(1839)に編纂が完了した『紀伊続風土記』によると、逆川王子社は吉川村一村の氏神であると記されており、現在は逆川神社と称して、明治43年(1910)に田の國津神社に合祀されて以降も、飛地社として旧来の位置に社地を構えている。地元自治会の吉川区が地縁団体となって敷地を所有し、日常の管理を行っている。現在の社殿や石段は、昭和12年(1937)に建立されたもので、10月18日には祭礼の神前式がここで執り行われる。このように、逆川王子は熊野参詣の巡礼地の一つであるとともに、地域の信仰の拠り所としても大切に守られている。



逆川神社(逆川王子)の祭礼

また、町内には、逆川王子の次の九十九王子社として、久米崎王子跡がある。古くは白瀉と呼ばれた入江があった地に突き出た高台にあり、現在は昭和39年(1964)に建てられた王子跡を示す石碑のみが残る。

道町の四叉路の北西にある深専寺は、奈良時代の高僧行基が開創した海雲院を前身に持つと伝えられ、寛正3年(1462)に明秀上人によって再興された浄土宗寺院である。皇室の熊野御幸では行在所にあてられたと考えられ、また聖護院門跡の熊野入峯の際の宿泊所としても利用された。文政9年(1826)に建立された書院は、聖護院御殿とも呼ばれ、欄間に菊の紋章の透刻が施されている。境内には、寛文3年(1663)建立の本堂を始め、江戸時代からの建造物が多く残っている。



紀伊国名所図会(湯浅旅舎深専寺)

四叉路の南西隅には、天保9年(1838)に建てられた立石と呼ばれる道標がある。北面の「すぐ熊野道」の「すぐ」とはまっすぐという意味であり、南下してきた人々にまっすぐ進むように伝えている。東面には、右(北側)を人差指で指し、「きみみてら」と彫られている。紀三井寺は、西国巡礼の第二番札所であり、この道が西国巡礼に使用されていたことを裏付ける。また、南側には「右いせかうや道」と刻み、ここから東に向く道が高野山に至る道であることを示している。

嘉永4年(1851)に刊行された『紀伊国名所図会』には、この四叉路の様子が描かれており、深専寺の境内や立石とともに、往来を賑わす人々の様子や、宿屋、料理屋といった往来の人々相手の商売の様子もいきいきと描かれている。



熊野街道道標(立石)

かつて広川右岸に広がっていた低地、白瀉（白方）^{しらかた しらかた}を望む高台に、勝楽寺がある。平安時代後期に創建され、当時の熊野古道は勝楽寺の境内、もしくはその傍を通っていたと考えられている。湯浅氏の庇護の下に隆盛を極め、荘厳な伽藍を誇っていたことが、大門坂や踊堂といった地名からも推測される。京都醍醐寺の金堂（国宝）は、この近辺にあったお堂を移築したとする説が有力で、その建築様式からは平安時代後期に建立されたことや、鎌倉期の改造による紀州独特の構造が見られること等の特徴が表れている。勝楽寺に伝わる仏像群からも、その歴史と往時の繁栄を知ることが出来る。



勝楽寺境内

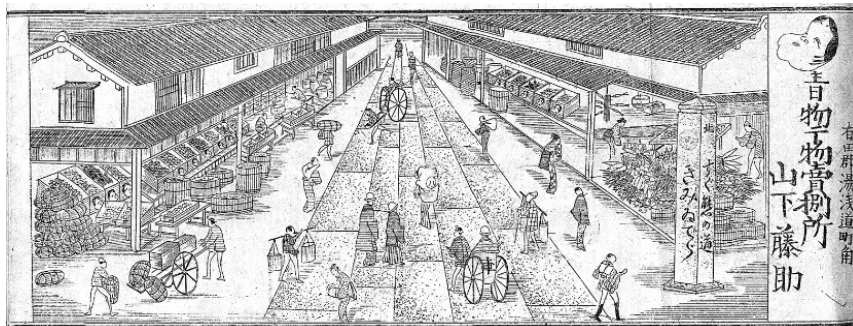
承元4年（1210）、明恵が熊野参詣の道中であった藤原長房と面会した「白方宿所」や、建保4年（1216）に熊野に向かう藤原頼資が宿泊した「湯浅白形堂僧房」は、ともに勝楽寺を指すと考えられ、熊野参詣との関係がうかがえる。



勝楽寺近辺の寺院との関連性が考えられる地名の広がり

「道」が果たしてきた役割

修験道の修行の場としての熊野は、貴族の熊野参詣へと繋がり、それはやがて庶民へと広がっていった。湯浅では、湯浅氏の隆盛を背景に、町としての発展の基盤が造られた。近世に入ると、紀州藩によって街道が整備され、一里塚と一里松を



有田郡名勝豪商案内記〈青物干物売捌所 山下藤助〉

設置し、伝馬所^{てんまじよ}を各所に置いて官吏の往来や官用荷物書状の運搬にあたらせた。熊野古道は西国三十三所巡礼の道と重なり、多くの人や物資が行き交った。道町の立石が卒都婆型をしているのは、西国巡礼の途中に行倒れた者への追善供養のためとも言われている。

近世は、伊勢へのお蔭参りに象徴されるように、多くの庶民が、寺社参詣を表立った理由としながら、物見遊山としての旅を行うようになっていった時期でもある。『紀伊国名所図会』には、糸我峠の茶店で楽しそうに茶菓子を食べて休憩する旅人の様子が描かれている。ここでは特産物のみかんを貯えて盛暑の頃に販売し、旅人がその美味に感嘆したとある。人々の旅の目的は少しずつ変化をしていった。



紀伊国名所図会〈糸我峠〉

明治維新を経て近代になると、鉄道が導入されるようになる。有田地方では、大正4年(1915)に私鉄の有田鉄道が山田川河口にあった海岸駅と金屋口駅の間に通し、さらに昭和2年(1927)には国鉄紀勢線^{きせいせん}が、紀伊湯浅駅(現在の湯浅駅)まで繋がった。現在の湯浅駅駅舎は、一部改変されているものの、開業当時からのものである。

国鉄紀伊湯浅駅の開業は、湯浅の市街地の構成にも変化を与えた。中世から近世までの時代には、熊野古道の街道筋に町場が発達し、それが海に面しながら市街地が広げられ、そこでは醤油醸造業が発展するとともに沿岸部では港の施設が整備された。鉄道の開通に前後して、今度は熊野古道の東の山側へ市街地が広がっていった。有田郡役所、湯浅税務署、湯浅町役場などの主要な官公庁施設が、当時の市街地の中心に位置する字道町や字中町から駅に程近い



JR湯浅駅(旧国鉄紀伊湯浅駅)

字南道1055番地周辺に移転していることが、その顕著な例である。熊野古道を町の中心軸に据えたまま、新たな移動輸送手段と官公庁施設をその傍らに設けることで繁華街が形成され、より多くの人々の往来と賑わいを生み出した。昭和という新しい時代の幕開けに相応しい近代的な市街地が、熊野古道と駅を結ぶ界隈に開かれたのである。



市街地 形成の 経過 (凡例)	①中世以降、熊野古道の街道筋として市街地が発達	
	②海岸の埋め立てなどにより市街地が海の方へ拡大（醤油醸造で栄えたエリア）	
	③近世初頭に港湾施設と臨海市街地を造成（海との関連の強いエリア）	
	④国鉄の開通により熊野古道と駅との界隈に市街地が開発	

昭和35年（1960）頃の航空写真で見る熊野古道を主軸とした市街地形成の経過

現在、幹線道路としての役割は昭和35年（1960）に郊外に新設された国道42号線にゆずったものの、市街地の中を通り抜けている湯浅の熊野古道は、人々の生活道路として、今なおその往来は活発である。また、糸我峠を越えて王子社などに参拝し、その歴史を学びながら市街地の熊野古道へと進入してくる来訪者の姿もよく見られ、熊野古道は町内外の多くの人々から親しまれ続けてきたのがわかる。平成16年（2004）の「紀伊山地の霊場と参詣道」世界遺産登録によって熊野への注目が再び高まってから10年の節目を越え、紀伊山地にある霊場と、そこに向かう参詣の道は、国外からも注目を集めるようになった。



糸我峠を歩き、逆川王子に参拝する人々

また近年には、江戸末期まで続いていた行事が再開された。平成24年(2012)に深専寺で営まれた京都の^{しょうごいんもんせき}聖護院門跡による護摩焚きは、熊野や大峰での修行の帰路、熊野古道を行く^{おのみお}聖護院門跡一行が立石の脇で護摩法要を行い、深専寺にて休息し、もてなしを受けたという史実にちなんだものである。平成27年(2015)にも、大峰奥^{おくがけ}駈修行を終えた聖護院門跡の山伏行列が熊野古道を行進し、深専寺で山伏問答や護摩法要が行われた。護摩壇から立ち昇る白煙は人々の祈りとともに空へとたなびき、熊野古道の道町周辺には山伏たちの法螺貝や鈴の音が鳴り響いた。



聖護院門跡による護摩法要

熊野古道における人々の往来は、古くは参詣の旅であったものが、中世から近世、近代へと移るにつれて商いや観光を目的とするものが盛んに行われるようになり、徒歩や馬での移動は、やがて自動車など動力を持った乗り物へと変化してきた。熊野古道を取巻く周辺も、港や鉄道の整備が進み、それぞれの特色ある市街地が形成されていった。

時代が移り変わり、旅の目的や移動手段が多岐にわたるようになっても、熊野古道を歩き、王子社に手を合わせる人々の根底には常に「信仰」があり、それは絶えることなく今も続いている。住民にとっても、峠を越え市街地の中を抜けていく熊野古道は特別で、他の道路と比べてその存在は明らかに別格との思いがある。時代の旅人たちが歩んできた「道」を通して見えるまちの変遷とその重層性には、熊野三山へと繋がる信仰を源流とする熊野古道の往来が、まちの誇りとともに連綿と受け継がれている。



熊野古道に見る歴史的風致の範囲